

The Journal of Fluoride Problems

フッ素問題ジャーナル

No.21 (2021 年 5 月号)

フッ素情報センター発行

北海道旭川市旭岡 2 丁目 13 番地 清水央雄

～ 目次 ～

お知らせとトピックス	p2
ある中学生の意見	p3
教育を明るくする宮崎県民連合によるフッ素洗口中止要望書	p4
村上先生の思い出・続編	p5
連載 フッ素問題と保健室と自分のこと	p6-8
要約 フッ素化 この巨大なる矛盾	p9 ～ 13
山形教育新聞に連載されたフッ素シリーズ紹介・第 7 回	p14 ～ 18
編集後記	p19

お知らせ

今年のフッ素研究会・全国集会は11月23日（火・祝）を予定していますが、新型コロナウイルスの状況によっては昨年と同様、オンライン開催になるとのことです。

トピックス

1、4月1日に行われたコンシューマネット主催の学習会「学校でのフッ素洗口を考える」オンライン講演がYouTubeで見れます。https://www.youtube.com/watch?v=Jmy_aGfjWtk
関連資料等はコンシューマネットのサイトをご覧ください。「タネまき木曜会 フッ素」で検索して下さい。

2、清水央雄著・フッ素問題資料集をネットで見れるようにしました

こちらで見れます。<http://432dent.jugem.jp/?eid=22>（「フッ素 かたくり歯科」で検索）
なお、URLの末尾22が、「フッ素問題資料集」ですが、末尾が8の「フッ素の真実」がヒットするかも知れません。そちらはフッ素問題資料集を専門家でなくても読み易く書き直したバージョンです。

3、不適切なフライパン広告

「有毒ガスの危険性がある PFOA 不使用なので安心してお使いいただけます」との説明がされたフライパンが販売されています。しかし、フッ素樹脂コーティングされています。

PFOA はフッ素樹脂製造の際に使用されていた助剤に過ぎず、PFOA を使用してなくてもフッ素樹脂がコーティングされているので過熱すると有毒ガスが出ます。

https://item.rakuten.co.jp/copa/kyo-020/?scid=al_ich_ppp_31076&iasid=07rpp_31076_202604__e4-kkpf6m57-3i-72d0a088-df1e-405d-ae40-4ce805cd4395

業者は良く知らずにこのような、おかしい説明をしたのか、あるいは知っていながら誤解を招く、悪質な表現をしたのかわかりませんが、ご注意ください。

ある中学生の意見

鹿児島県のある中学1年生の貴重な意見を紹介します。
なお、フッ素の講演を聞くなどしたわけではなく、自分でインターネットで調べて学習したそうです。

～ 中学生の僕は、フッ化物洗口についてこう思っています ～

1, 保護者だけでなく中学生にも説明をしてほしい。

自分たちの知らない間に、親が説明を聞いて、市や先生たちの意向に従うことに不安がある。実際にするのは、僕たちであって大人はしない。大人がしない理由はなんなのか。本音を隠しているのではないか。

2, 学校でクラスターになるような行為は、避けてほしい。

僕たちは、入学してからコロナによって、部活動や行事の中止があった。また、給食や話し合いもグループの活動ができずいろんな楽しみを我慢している。僕らが我慢しているのは、飛沫が飛んでクラスターとなるのを避けるためだ。それなのに、みんなが一斉にブクブクうがいをしてはきだす「フッ化物洗口」は、最もリスクが高い行為である。

なぜ、今、フッ化物洗口をする必要があるのか中学生の僕は知りたい。

3, 大規模校の状況は、フッ化物洗口にそぐわない。

むし歯予防として今まで僕は、歯磨きや噛むことそして食生活が大事と学習してきた。だから僕は、小学生の頃は、フッ化物洗口の時間は、タクトブラシや糸ようじを使って歯みがきをしていた。クスリで予防しようとは思わなかった。また、洗口液を吐き出したコップを、また次の日の給食の後に使うことを気持ち悪いと思っていた。

他の人は気持ち悪いと思わないのか、大人の方は平気なのか。

学校は、大勢の人間が、同じ時間に短い時間で水道を使う。給食のお盆も歯みがきもうがいもコップも一緒である。

衛生的に使うためには水道施設は少なすぎるのである。

4, 同じあやまちを繰り返さないのが大人なのではないか。

フッ素はユダヤ人を迫害することに使われた。人をおとなしくさせるために使ってきた歴史がある。僕は歴史が大好きだ。歴史は、過去を学び、今を生きる自分たちが、未来に同じあやまちをしないための学習だ。

過去に人間が薬で過ちを犯したことは、僕も学習して知っている。

同じ過ちを繰り返さないのが大人なのではないか。

2021年5月24日

学校における「集団フッ化物洗口事業」に関する要望書

宮崎市内小・中学校校長 様

教育を明るくする宮崎県民連合 議長 小沼 新
副議長 野地 一行、中原 広幸、相馬 早苗、
長友 利貴

日頃より、宮崎市の教育発展のために日々ご尽力されておられることに対して、心から敬意を表します。

さて、宮崎市内の小中学校で「フッ化物洗口」が実施されるようになり11年目を迎えました。フッ化物洗口については専門家の中でも賛否両論があり、洗口液の作成ミスやアレルギー症状が出るなどの事故も報告されています。フッ化物洗口に使われる薬品「ミラノール」の主成分フッ化ナトリウムは、本来殺鼠剤、殺蟻剤、木材の防腐剤、さらにはサリンの材料になる毒物指定の劇薬です。学校は教育をいとなむ場で、薬を使って病気を予防・治療する場所ではありません。それは医師・歯科医師の仕事だと考えます。むし歯は、学校で薬を使ってまで予防しなければならない、人に移す恐れのある、命に関わる重大な病気だとは考えられません。

昨年より新型コロナウイルス感染症の拡大、さらに最近では変異株の感染が猛威をふるっており、宮崎市内でも児童生徒の感染が報告されるようになりました。学校現場は消毒やマスク着用指導などの業務が加わり、多忙化に拍車がかかっています。

このような緊急事態の中でのフッ化物洗口実施に対して以下3点要望をいたします。

第1点 宮崎市でのフッ化物洗口事業導入時に宮崎市議会市民経済委員会委員長報告で、実施にあたって4つの要件が付託されました。その第2点目に各学校での洗口事業の決定にいたる基準があります。～「学校、保護者、学校歯科医の三者合意が得られているかの判断基準についてであります。それぞれ相当数の割合の賛成があることを判断基準とし、過半数を超える程度の同意では実施しないこと。」～この要件を踏まえて「フッ化物洗口」にあたり教職員全員の意見を聞く機会を保障すること。また教職員の意見反映ができるようにすること。

第2点 コロナ感染拡大期における「フッ化物洗口」については推進する専門家からも危険性を指摘する声が上がっています（別紙資料）。洗口液を吐き出すときにエアロゾルが発生し感染が拡大する危険性があります。今はコロナ感染のリスクを可能な限り抑え込むことが重要です。したがって、この時期の「フッ化物洗口」は見送ること。

第3点 コロナ感染における業務増加で教職員は疲弊しています。さらに「フッ化物洗口」事業による業務の負担が増えています。教職員の健康を守るためにも「フッ化物洗口」は中止すること。

以上3点を要望します。

前号で村上先生のエピソードを紹介しましたが、今回もまた紹介いたします。
2005 年発行のフッ素研究 24 号に村上先生が書かれた「高橋暁正先生と私」から抜粋（一部要約）します。

群馬県に渋川市という小さな都市がある。その歯科医師会の常務理事の一人（神奈川県歯科大学飯塚教室出身）が、歯科医師会長らを言いくるめ、渋川市の公的事業として小中学校における集団的フッ素洗口を推進しようと図っていたらしい。当然のように父兄や養護教諭らの反対運動が起こった。私の医院には少なからず渋川市からの患者さんがいる。

私は何度も渋川の患者さんから「フッ素って、そんなに良いものなんですか？」というような質問を受けるようになった。

推進派は飯塚喜一氏や小泉信雄氏（群馬県予防課職員、新潟大堀井教室出身）を呼んで氣勢を上げ、反対派はまず高橋先生を呼び、その後、柳沢先生をお呼びした。この柳沢講演を私は聴きに行き、そこで初めて先生に会った。（フッ素研究 9 号・1988 年参照）

柳沢先生の講演会では私は一般聴衆に混じって後ろの席にいた。ところが周囲に妙な連中が何人もいたのである。彼らは講師の一言一言に顔色を変え、「チクショウ、あの馬鹿、こんなウソ言いやがる」と口々に罵るのである。後でわかったことだが、彼らはみんな歯科医師で、推進派が動員してきた連中らしかった。

講演後の質疑応答では何人もが、かなきり声をあげ柳沢先生を激しく非難した。先生は憮然としていた。この光景を見て私はフッ素問題の本質が一瞬で理解できたように思った。

こういう風潮は歯科界の内部でかたをつけなければならない。討論にはそれなりの礼儀がなければならない。

医歯大卒業後、私は群馬大学の医学部口腔外科から生理学教室に移り、そこで学位を取得し、ほぼ 10 年在籍した。生理学教室で常に接触したのは医師を中心とする研究者や医学部の学生である。先に述べたような低質な連中は、医学部の中には一人もいない。一方、開業医仲間の歯科医の友人にはいいやつもいるが、中にはとんでもなく低質な連中もいる。歯科医は医師より一段低く見られるのが普通であるが、それはこんなところにも一因があるのではないか。私はそんな風潮に我慢がならなかった。

その後、私は一年間かかって「フッ素信仰はこのままでいいのか」という論文を群馬県歯科医師会の機関紙に掲載したのだが、この論文を書くために私は余暇の全てをつぎ込んだ。私をここまで駆動したのは、医師である高橋先生や柳沢先生に軽蔑される前に、こんな連中は同業である私という歯科医の手で論破してしまえという気持ちが強く働いたからである。

これをきっかけに私は柳沢先生と親しくなりフッ素研究会に加わった。

～ 連載 第10回 ～

フッ素問題と保健室と自分のこと

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

〈〈〈 要約 〉〉〉 フッ素化 この巨大なる矛盾 その 12

FLUORIDATION THE GREAT DILEMMA

ジョージ・ウォルドボット 村上徹訳

◆ ◆ ◆ 第 16 章 フッ素化の推進運動 ◆ ◆ ◆

1950 年以前であれば科学者はフッ素という物質は有害で毒性があり、歯牙フッ素症や骨格の変形をきたす原因であるとみなしていた。しかし、これをアメリカ中の水道に添加するとなると、そのような認識は間違いとして是正しなければならない。こんな異常な逆転は、どうしたら可能になるのか。この答えはただ一つ、全米の科学団体がこれを情熱的に推進することである。普通なら、フッ素化のような手段が認められるには、学会や学会誌において科学的証拠を慎重に分析して行われるのが正常なやり方である。しかしフッ素の場合はそうではなく、科学に必要な反論や国民感情などは全く顧みられなかった。科学団体がフッ素化に賛意を表する場合も、会員全員の意見を調べた例は見当たらない。少数の評議員から世間に対してなされた言明が、はたして真にその団体全員の合意だと言えるだろうか。

【基礎となった研究】

1951 年の、おかしな会議の直後から、多数の科学団体が相次いでシンポジウムを開催し、フッ素化の基礎固めをして行った。一例をあげると全米科学推進協議会は、2 度に渡ってフッ素化推進だけを目的としたシンポジウムを開催した。(1951 年のフィラデルフィアと 1952 年のセントルイス) 参加者は全員が公衆衛生局の関係者か、フッ素の廃棄物で問題を抱えている企業関連の科学者で、フッ素化に反対するようなデータを持っている科学者は皆無であった。そこで発表された論文は、1951 年のバルの忠告の「フッ素には良い作用があると断言した以上、後戻りはできない」が強く影響を受けていた。早い時期にフッ素化を是認した団体の一つに、「慢性疾患評議会」があり、アメリカ病院協会とアメリカ公共福祉協会が設立した国家機関であり、メンバーには大学学長、製薬会社社長、元公衆衛生局長、労働者代表、市民運動指導者などが連ねていたが、これらの多忙な人達にはフッ素の文献を読む時間などはなく、当局から出される所見を信頼するしかなかった。

その当局自体その所見が独自の研究に基づいたものでないと、1954 年の慢性疾患ニュースレターで書かれている。

【全米研究協議会 (NRC)】

NRC は 1916 年にアメリカ学術会議の下部組織 (研究機関) として、科学技術分野の主要な学会の協力を得て設立されたもので、科学の各専門分野の指導者によって構成されていた。NRC では公衆衛生局とフッ素関連企業の密接な連携をもたらした。NRC 特別委員会の 9 人のメンバーは、主に 3 人で牛耳られ、一人はニューヨーク州ロチェスター市にあるイーストマン歯科診療所長の B.G. ビビーで、製糖会社の研究財団のための研究も行っていた。また一人はシンシナティー市保健衛生コミッショナーで、シンシナティー大学ケタリング研究所の副所長である F.F. ヘイロスであり、ケタリング研究所は、深刻なフッ素汚

染問題に直面していたアルコア社ほか 8 社の資金援助を受けていた。(注：ケタリング研究所は「有鉛ガソリンは無害」であると発表したこともある御用研究所) 3 人目は公衆衛生局の H.T.ディーンで、しばしば「フッ素化の父」と呼ばれている。これら 3 人の存在下において他の中立的メンバーは、時間も労力もかかる厄介なフッ素の文献調査等ができず、フッ素の有害性に気が付かなかつたのは無理からぬ話であろう。この特別委員会の最終報告書は、1951 年 11 月に提出されたが、この中で言及された論文の数は 30 であった。その 30 論文の著者のうち 2 人以外は全員、公衆衛生局や企業のようなフッ素推進組織と関係のある人たちであった。この報告書は 300 万人以上が何世代にも渡って天然フッ素水を飲用していることをもって水道フッ素添加は安全だと言っている。この主張は「何百万人が何百年もの間、さほど問題なくタバコを吸い続けている以上、タバコは無害だ」というのに等しい。医師がある疾患の原因に気が付かぬ時は、臨床でその疾患に遭遇することがどんなに多くても、その源を確定することは不可能である。これはタバコ、フッ素、アスベスト、カドミウム、水銀などの無数の環境物質による慢性中毒の場合にも当てはまる。NRC の報告書には、もう一つの重要な条項がある。フッ素化されたミシガン州グランドラピッズ市でも、比較対象都市のマスキーゴン市でも、同様に虫歯が減少したのであり、フッ素化以外の原因で両都市の虫歯が減ったのであろうが、それについては特別委員は何の説明もない。

【アメリカ医師会】

医師にとっては医師会の声の方が大学よりはるかに強力である。従ってアメリカ医師会の賛成は、フッ素化というバスの運行にとっては決定的である。

もしもアメリカ医師会が「フッ素化は無害である」と言えば、それを吟味するようなデータの入手は不可能になる。公衆衛生局は生化学者 F.J.マックルーアをこの仕事に着手させた。マックルーアは 1951 年にアメリカ医師会の薬理・化学委員会と、食品・栄養委員会に出席して「飲料水にフッ素を添加しても無害である」と断言した。しかしそれにも関わらず、この 2 つの委員会は「骨粉錠や糖衣錠など、天然フッ素を多く含むものや、歯磨剤やチューイングガムのように後からフッ素を添加したものは、水道がフッ素化された地域では避ける必要がある」と警告した。驚いたことにアメリカ医師会雑誌の読者のごく少数の人たちは、この 1951 年の賛成案が、フッ素を長期摂取した場合の臨床データなどが何もないまま決定したことを見抜いていた。その問題があることを見抜いた人の手によって「アメリカ医師会はフッ素化に賛成」との決議がされることを「アメリカ医師会はフッ素化に原則として賛成」と「原則として」という表現を付加した。とは言ってもアメリカ医師会の専務理事の G.F.ラルと雑誌「今日の健康」の編集長の W.W.パウエルは 2 人はフッ素化推進の猛烈なキャンペーンを行い、この 20 年間にその雑誌に載ったフッ素関連の論文は、すべて「フッ素化は安全である」との言葉を連ねている。アメリカ医師会の一般会員は、フッ素化の安全性と同様、価値の解釈のうえでも極端な偏見に晒されてきたとしか言いようがない。1957 年 8 月に私の要望を受け、医師会の食品栄養委員会と薬理化学委員会は、シカゴの公聴会でフッ素化の論評を行った。私はフッ素の代謝やフッ素中毒の症例の報告などを行い、また、放射線医師の F.B.オクスナー博士は、公衆衛生局の統計研究の大きな誤りや、天然フッ素によるフッ素中毒などの報告をしたが、私やオクスナー博士の話は立て続けに賛成派のメンバーによって妨害されるという、敵意に満ちた雰囲気

であった。この公聴会の目的が、両陣営の論争の誠実な検証にあったのではなく、医師会が、いかにも慎重にこの問題を検討したと見せかける所にあったのが露呈した。公聴会の報告書では「ウォルドボットの慢性中毒に関する症状は一貫性を例示できていない」と批判しているが、第9章に書いたように、フッ素中毒の症状は極めて多彩であることを認めていることになる。また報告書では、フッ素化された飲料水の生理的作用が、水中の他のイオンの性質や濃度により、個々で予想もできないほど多様になることを指摘している。

さらに「飲料水や食品の ppm の値よりも、1日当たりの総フッ素摂取量が問題であり、異なった気温や異なった習慣の人たちのフッ素の摂取量は極めて多彩である」「安全限界を保証するために十分な人間と十分な期間について測定するのは実際上不可能である」と書かれている。

かくして巨大なる矛盾が浮かび上がったのだ。

《アメリカ医師会代議員会》

報告書は猪突猛進するフッ素化賛成集団により支持を受けた。これに反動的なある会員は、この火の噴くような問題を避けようとした。ある会員は私への手紙でこう書いた。「フッ素化にあからさまに反対することは政治的に自殺行為です」しかし、それでも 1/3 の代議員がフッ素化に反対した。

《公衆衛生局によるフッ素化の支持》

アメリカ医師会やアメリカ歯科医師会、その他の強力な団体は、合衆国内のフッ素化をさらに推進していった。科学団体の役員と委員は結託し、こうした科学問題には不可欠な自由討論は極力省かれた。

賛成派の長大なリストに上げられた団体の中には、公衆衛生学会のような、公衆衛生局と密接な関係にある団体だけでなく、アメリカ小児科学会のような独立した専門団体もあった。世間から尊敬されるようなこのような団体が道を拓くと、合衆国内にある無数の集団が、問題を何一つ研究することなしに請願の後に続いた。青年商工会議所、労働組合、婦人連盟、PTA、ボランティア団体、著名な市民、科学記者、政治家、政府官僚、さては大統領までもがこのために名前を貸したのである。

かくして国レベル地域レベルを問わず、賛成する者の数は雪だるま式に増えていった。

【WHO】

フッ素化は合衆国内ではこのように多数の団体の賛成を獲得するという著しい成功を収めたが、海外ではごく限られた賛成しか得られなかった。その中でも FDI (世界歯科連盟) はごく少数の例外の一つである。アメリカ医師会の報告書が出た翌年の 1958 年に WHO はフッ素化について研究するためにジュネーブに専門委員会を設置した。7人の委員のうち、少なくとも5人は母国でフッ素化を推進してきた者だった。そのうちの2人は、フッ素の廃棄問題で深刻な局面に立たされていた組織に所属していた。

スウェーデンのある委員は合衆国公衆衛生局の研究資金や、スウェーデンの歯磨剤メーカーから特許料を受けていた者だった。1969年7月、ボストンで開催された WHO 総会で、フッ素化を世界各国に勧奨することが議論されたが、イタリア、セネガル、コンゴなどが強くフッ素化に反対した。イタリア代表はフッ素化を「全てのものに添加物を加えないではいられない現代の狂気」とまで言い「我々が呼吸し摂取している空気中や食物中のフッ素量は未知である」と、特に次の世代へ障害を与える可能性を警告した。それにも関

ならず、会議の最後になって 131 国代表 1000 人のうちわずか 50~60 人しか出席していなかった時に懸案となっていた全議案が一緒くたにされて投票にかけられ、フッ素化の決議案が通ってしまった。

【その他の国々によるフッ素化の推進】

1952 年 2 月から 4 月にかけてロンドン保健局の使節団がアメリカのフッ素化都市やメリーランド州ベセダ市にある国立歯学研究所、シカゴのアメリカ歯科医師会本部などを歴訪した。イギリスがフッ素化を決めた後、米国公衆衛生局はオーストラリアとニュージーランドでの導入に狙いを定め、公衆衛生局 3 名の研究使節団を現地に訪問させ、アメリカ流のキャンペーンを開始した。カナダでは上水道フッ素化に関する調査報告委員会が創設されたが、その委員の一人はカナダでのフッ素化推進団体であるカナダ保健連盟の名誉顧問であり、しかも娘がフッ素汚染で問題を抱えていたアルミニウム製造会社の社員だった。彼は 1960 年 5 月にトロントで開催された公聴会における委員会での審議の指導的立場であり、カナダ全土でのフッ素化を提唱するパンフレットを配布した。しかしその他の国々では簡単にはいかなかった。多くの科学者がフッ素化に異議を唱えたからである。北アフリカにあるフランス経営の燐酸鉱山の労働者や周辺住民の骨フッ素症が報告されていた。イタリアの火山地帯では食物や飲料水中の高濃度のフッ素が問題になっていた。アイスランドではヘクラ火山がたびたび噴火して羊や牛や農作物にフッ素被害の深刻な経済的損失を引き起こしていた。インドでは広大な地域に地方性フッ素症が蔓延していて、保健行政当局の関心はもっぱら、いかにして飲料水からフッ素を除去するかだった。

【全米アレルギー学会】

スウェーデンやオランダなどの海外の科学者がフッ素の有害性を認識するようになってきたちょうどその頃、公衆衛生局は全米アレルギー学会の役員らに対して、フッ素推進の声明を出すように求め、1971 年 6 月、アレルギー学会の 11 人の評議員は満場一致で次の声明を発表した。「水道フッ素化に使用されるフッ素でアレルギーや不耐性を起こす証拠は全くない」しかし奇怪なことに、これら著明な科学者の中にフッ素の生体影響の研究をした者は 1 人もいなかった。また会員の意見を聞くこともなかったし、会員の患者にフッ素中毒に罹患した者がいるかどうかにも全く調べられなかった。この声明には 7 論文が付随していたが、ある論文では歯磨剤中のフッ素やフッ素ドロップによる激しいアレルギーについて記述がある。またある論文はフッ素錠によるアトピー性皮膚炎と蕁麻疹の症例が記載されていた。しかし飲料水中のフッ素による障害を、数々の証拠をあげて明らかにした科学的文献は、一つも紹介されていなかった。この声明が出された 1971 年に公衆衛生局はアレルギー学会の 11 人の評議員のうち 4 人に対して総額約 78 万ドル（注：現在の日本円で約 5 億円）の研究助成金を支払った。他のほとんどの評議員も過去にこのような助成金を受け取ってきた。公衆衛生局の助成金が政治面でしばしば重要な役割を演じるのは良く知られている。残念なことにこの声明は、この人たちの顔ぶれから、あたかも純粋に科学的なものであるかのように受け取られ、広く流布した。ここに我々は、賛成派の常套手段をみてとることができる。そのやり口とは即ち、ワシントンの公衆衛生局で創られたフッ素化賛成のメッセージが、ある団体から別の団体へ渡り歩き、最後にまたワシントンへ戻ってきて、公衆衛生局の手で行政の立場として再度繰り返される。なぜこんなに多くの学術団体がフッ素化の害について熟慮することもなく、個人的な小グループの言説に反

応してバスに乗り遅れまいとするのであろうか。その答えのいくつかを上げるとすると、次のようなことだろう。

《虫歯を予防したいという歯科医師の欲求》《この計画の立案者の威信》《フッ素の長期間の生体作用に関する知識が欠落したまま、専門知識を有する第三者を説得する保健官僚の能力》《賛成する科学者には研究資金を簡単に与え、反対者には与えない》《このプロジェクトは多くの人道主義者に深くアピールできた》これらの要因が絡み合ってフッ素化が推進されてきたのだが、忘れてはならないのが公衆衛生局歯科保健部の存在である。この部局の医学やマスコミに対する影響力は非常に強大である。

【公衆衛生局】

1950年6月にフッ素化を決定した公衆衛生局は、米国健康教育福祉省の1部局である。同局の1部門に国立歯学研究所があり、メリーランド州ベセタに置かれているが、設備とスタッフは、おそらく世界最高水準の歯学研究所であろう。合衆国内外の多数の科学者や歯学部が、情報と資金援助を求めてここにやってくる。このようなトップレベルの科学水準であるため、議会の指導者や大統領は、局のアドバイスをそのまま受け入れてしまうのである。同局歯科保健部とアメリカ歯科医師会（ADA）は、トップ同士が密接な関係にあるし、また役員や委員会、協議会などでメンバーを交換しあっている。さらに両者はアメリカ医師会の政策形成団体の代表者でもあり、例えば、局はシカゴにあるアメリカ医師会本部に恒久的ポストを有していて、局係官はアメリカ医師会や州、準州の医学団体の重要な会議のメンバーになっている。このように、公衆衛生局は全国各地のあらゆる科学団体に深く根を下ろしているばかりか、軍、FDA、環境庁（EPA）とも密接な関係にあり、全米学術会議を通して産業界とも深く関わっている。局の官僚は主要な学術雑誌の役員にも名を連ね、マスメディアとの接触も欠かさない。威信にものを言わせ、研究資金を左右することでこの役所が簡単に科学者や学識経験者の思考を支配できるということに疑いはないのである。フッ素応用のためにどれだけの資金が使われたか不明だが、1957年から73年にかけてADAが545万ドル（現在の日本円で約50億円）を受け取っている。このうちどれだけがフッ素化のために使われたかは確かめようがないが、何百万ドルといった額なのは確かだろう。

1950年に始まったフッ素化運動は猛烈な勢いとなり、あらゆる学術団体は公衆衛生局が吹くハーメルンの笛に誘い出されたネズミのように、フッ素化という名のバスによじ登ろうとする。公衆衛生的手段をこぞって支持した結果がどんなことになるかを考えると、豚インフルエンザワクチン禍の記憶が蘇る。

ワクチンは1億3千5百万ドルもの巨費（現在の日本円で約500億円）を投じて接種が行われたものの、多数の致死的なギランバレー症候群を起し、1976年に急遽中止された。政府はある主張を無視して強行したためである。（注：4千万人に接種され、500人以上がギランバレー症候群に罹り、30人以上が死亡した。スペイン風邪の二の舞を恐れて大規模に行われたのだが、実際は致死性は非常に低いということがわかった。製薬会社の言いなりになったとも言われている）それにも関わらず公衆衛生局はいまだにこの政策の大きな過ちを決して認めようとしないのである。もちろん、公衆衛生局だけがこの巨大なフッ素化実験参加の熱狂を拡散させてきた責任があるわけではない。多数の科学者を含む世間もまた、歯科のユートピアを信じたがってきたのである。（次号につづく）

山形教育新聞に連載されたフッ素シリーズ紹介・第7回（その34～41）

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

このページは非公開（購読者限定）になります

【編集後記】

新型コロナウイルス対策が大成功したと世界中から称賛されている台湾でも感染が広がり始めています。日本でも、しっかり対策を取っている鳥取県は、人口比でも非常に感染者が少なかったものの、最近はやや増加の兆しが見えています。

結局はいくら対策を取っても完全に防ぐことはできず、いつかは拡大してしまうものかも知れません。しかし、急激に感染が広まると医療崩壊してしまうので、対策は必要です。

私は4月16日までは札幌ドームなどでコンサドーレの試合を見ていましたが、それ以降この6試合のホームゲームは現地観戦を見合わせ、TV観戦にしています。北海道でも感染が広がっているということもありますが、感染見合わせの最大の理由は、感染予防に無頓着な人が散見されるからです。例えば4月16日の札幌ドームでは、私の近くにいた6~7人のグループのうち大半がビールを飲んでいたので、マスクを外しっぱなしでした。しかも大きな声で談笑し、さらに禁止されている声援を送っていました。このようなモラルの低い人たちが感染を広げているのではないのでしょうか。さらに札幌ドームでは、売店の列で私の後ろの人がソーシャルディスタンスを取っていませんでした。

試合後に札幌駅近くの某有名イタリアンレストラン行ったのですが、6名ほどの若い女性のグループが、普通の6人掛けテーブルで密な状態で、アクリル板などもないのに大声でマスクせずに談笑していました。これでは感染が広がるわけです。ちなみにそのお店はとて広く、私の席とはかなり離れていた所以我はそのまま食事しましたが、安心して食事ができないのは嫌なので、次からはテイクアウトをホテルの自室で食べたいと思います。

ワクチン接種では、誤って生理食塩水を注射する例（沖縄県浦添市と奈良県生駒市）や、濃度が規定よりも薄くなった事例（長崎県新上五島町）、3日前に接種を受けたばかりの人が誤って接種を受けてしまう（岐阜県各務原市）などのミスが相次いでいます。各務原市の例は、老人ホームでついふらふらと非対象者が接種待ちの列に入り込んでしまい、リスト確認を受けずにそのまま注射をされてしまったそうです。もっとひどいことに1日に2回接種してしまう例（愛知県豊橋市）すらあります。

瓶にわずかに残っている液を集めて接種するという、衛生面で問題のある不適切な行為も散見されています。

最悪な例は、5月18日に奈良県五條市で起こった、使用済みの針を別の人に使った事例です。これは絶対あってはならないことです。

やはり集団で医療行為を行うのは一定のリスクは避けられないということであり、フッ素洗口と同じです。ただ、虫歯と違って新型コロナウイルスは命に係わる問題なので、リスクを冒しても接種する意義はあるかと思います。（副作用や有効性の問題はあるので、100%意義があるかどうかというのがありますが）しかし一方、命に係わることもない虫歯予防では、集団実施のリスクを負ってまで実施する意義は1ミリもないのは言うまでもありません。